

水の都おおがき

短編小説コンクール

優秀作品集 二〇二二

令和4年度 第2回

水の都おおがき

短編小説コンクール

優秀作品集 二〇二二

大垣を知ること（選評）

審査員長 中村航

水の都おおがきを舞台や題材にした短編小説を募るこのコンテストも二度目を迎えた。全作品を読む審査を通じて、僕自身も知らなかった大垣のことを知れたり、懐かしい記憶を思いだしたり、現在の大垣の雰囲気を感じたりすることができた。応募していただいた方に、まずは感謝をしたいと思う。

金魚鉢のビオトープを観察しながら、地球規模の環境に思いを馳せる。そういうことに似ているのかもしれないが、大垣を知ること、もっと大きなものを知ることと同義だと思う（例えば日本という国であったり、歴史であったり、社会や人間関係の全体像だったりを知ること）。応募作を通じて、考えさせられることは多く、また大きかった。これはきつと書き手にとっても同じで、書き手は大垣を書きながら、実はもっと大きなものを書いているんだろうと思う。

選考は樋口健司先生と天岡久美子先生の力も借りて行い、最優秀賞作他を選ばせていただいた。

最優秀作は「街中の新幹線」。恋の始まっていく様と終わっていく様を、最初は物珍しかった「街中を走る新幹線」が当たり前のものになっていく様と対比させながら、描いた作品だ。彼に届かない気持ちも、それでもいいと思う覚悟も、それに疲れてしまう現実も、とてもリアルで胸を打つ。ハッピーエンドではないのに、ラストの夏のひまわり畑はとても美しい。走り抜ける新幹線の描写とともに、読者の心に鮮やかなイメージを残すだろう。

優秀作の「おもいでばこ」は、大垣市民会館が取り壊されることから始まる作品で、主人公の少女時代の昭和回想録的な作品。自分に起こったことではないのに、懐かしくて、愛おしい気持ち湧く。主人公の発言や行動が極端であったり、登場人物の目的がわからなかったりしても、読者として主人公の心情に寄り添えるのは、これが記憶を掘り起こして描かれた作品だからだろう。メタ的な比喩ともとれるタイトルも良かった。

佳作の「小舟」は時代小説で、遊女と泥棒の逃避行が描かれる。文章が達者で、構成も良く、時代小説としてよく書けている。特に気に食わないことあると舟を漕ぐ、遊女・霧里のキャラクター造形が素晴らしかった。小説の舞台を大垣として読むことは、充分できるのだが、それが明示されているわけではない。この賞の在りようとして、もう一工夫、大垣が描かれていれば、もっと選びやすかった。

惜しくも選外になってしまった作品についても、ほんの少しだけ触れさせていただく。「流れのままの舟に身を寄せ赴くままに馬の背に揺られし者」は史実をうまく利用して『おく

の細道』秘話が再構築されていた。キャラクターの造形がしっかりなされているので、短い物語の中からも松尾芭蕉の性格や考え方が伝わってきた。

「お盆のあとの墓参り」は、主人公が抱えているものが、無意識に求めていた人との再会によってほじめていく様が良かった。真夏の白日夢のような描写がとても合っているが、主人公の悩みが、もう少し具体的でなかったのが惜しい。

「大垣のおばちゃん」は、とても良い話だった。不幸や不運にもめげず力強く生きた伯母を慕う主人公の気持ちが伝わってくる。一代記として描くには、枚数が足りなかったかもしれない。「おじいさん、帰るところありますか？」は、読者の興味を惹く設定で、問題意識や現代性もあった。やや説明が足りておらず、物語の導入部だけが描かれている印象になってしまったのが惜しい。

「天の川螢」は、悲劇が待っているかもしれない未来も、ふたりでなら乗り越えていけるのではないかということ、信一自身が叶えた奇跡とともに見せることで、希望のある物語になっていた。

「水まんじゅうと京漬物」は、ホームドラマ的なエンタメ性がある設定・展開を楽しめた。キャラクターの感情を盛り込んだりした、もう少しボリュームをもたせた形で見たいと思える作品。

「残像」は、人生が終盤に差し掛かっていると思ひ込んでいた主人公が、旧友との再会で乙女の時代に引き戻され沸き立つ様が、大垣の風景や松尾芭蕉をうまく絡めて描かれていた。

「大垣散歩」は、嫌な記憶を残したまま離れた大垣を、懐かしく思えるようになった洋子の、いまの穏やかな幸福が伝わってくる物語だった。

「ピオトー普生活」は描写力があり、小説らしい雰囲気も持っている。少し要素を詰め込みすぎて、内容が散漫な印象になってしまっていた。

「もう一度、この町で」では、夢破れて故郷に帰ってきた青年が、淡い想いを抱いていた女性と再会してもう一度立ち上がろうとする。シーンだけを切り取って、物語の先をうまく読者に委ねる形にまとめられていた。

「ハンカチ」は、美咲の目を通して、不器用ながら優しさや芯の強さを持つ少年の清々しさがよく伝わってきた。細かい部分で設定がわかりにくかったり、説明だけになっていたのかもしれないと感じた。

「父を待つ」は、事故で死線をさまよう夢の中で父との再会が叶い、かつての父の「お前が死ぬくらいなら自分が死ぬ」の言葉通り自分が生かされたことと雄一が感じられたであろうことが読者に伝わる、心に染みるやさしい物語になっていた。

「大垣スイング・アウト・ボーイ」は、マニュアルや決まりごとに左右されやすい今時の男性の生憎がよく出ていて面白い。ツキカの気持ちの深さまで描かれていないのが惜しい。

「見えない足跡」は、社会人となった今も、大垣駅から家に至るまでの道にはこれまで重ねてきた自分の記憶がそこに残っていて、いつでも戻れるようなもう二度と戻れないような揺れ動く感傷が、よく表現されていた。

「驕った奢った」は絶望だけが待っている未来を抱え、行き場をなくした中年男のふるさとへの悔恨の旅。苛立ちと諦念が見せる幻のような、かつていじめていた友との邂逅は、混濁していく意識のような描写で面白かった。

「長松城の別離」は時代小説としてはとても良かった。ただこのボリュームでは、見せ場が作るのが難しかったように思う。

「次は桜の咲く季節に」は、恋愛の始まり特有のもどかしさや気恥ずかしさが、よく伝わってきた。

「麦秋」は、雰囲気のある小説だった。描かれたエピソードが、やや尻切れトンボの印象だったように思う。

「介護」は、バイタリティーのある女性たちが理想の介護を目指して団結する、面白そうな物語だった。落ちが弱かった。

「義円」基本的に史実で綴られており、背筋を伸ばして読んだ。小説としての独自性が欲しかった。

「良福寺のお駕籠」教訓的な児童文学で良い話だった。目新しさがあるともっと良かった。「ヒカリと俺の夏休み」するすると読め、テーマも良かった。話が勝手に進んでいる印象で、深みが出るとももっと良くなると思う。

「露天風呂」は、露天風呂を通して、「東日本大震災」「第二次世界大戦」「ロシア・ウクライナ紛争」に思いを馳せる物語。主人公の姿をもっと知りたかった。

「佐島さんの秘密」は、テーマ自体がとても面白かった。

「天から水まんじゅう」は、童話風ファンタジーで楽しい。タイトルも良い。

「首都・大垣」は「おがっさい」をモチーフにしたダークファンタジー。表の顔と裏の顔、隠された真の目的など意外性があった。

「希望 ―パリへ燃えているか―」は、昨年の応募作続編。五輪ネタでコメディタッチ。続編という発想には驚いた。

「OGAKI WESTERN」は、パラレルワールドの大垣を舞台とした決闘モノのウエスタン。設定が面白かった。
「最終電車」では荒れる主人公が描かれている。主人公像をもっと知りたかった。
「飛んで大垣」は、現代風のコミュニケーションを、大垣市特有の地理を利用したすれ違いを交えて描かれる。アイデアが良かった。

目次

最優秀賞	街中の新幹線	……	桜	1
優秀賞	おもいでばし	……	渡邊そよ香	9
佳作	小舟	……	中川薫	19

最優秀賞

街中の新幹線

桜

時速三百キロの新幹線を初めて間近に見たのは、国道の真ん中だった。一瞬。高架を走り去る白に青のラインの物体が目の前に現れた。

「新幹線!?!」

信号待ちの車の中で、思わず叫んだ。

運転席に座る彼は、私の反応に僅かに口角を上げた。子供みたいにはしゃいだことは、少し恥ずかしかったが、車に乗っていて、目の前を新幹線が通り過ぎるなんて、予想外だったのだから仕方がない。

「ここに住んだら、珍しくなくなるよ。」

「なんか、贅沢だね。」

私の言葉に、彼は小さく声を出して笑った。ポーカーフェイスの彼にしては珍しい反応だ。胸の辺りがきゅっと掴まれる。信号が青になる直前、彼は私の頭をくしゃりと撫でて、ゆつくりと車を発進させた。

岐阜県大垣市。

付き合ってから半年して、彼はこの地に転勤になった。同じ職場の同僚で、無愛想な人だった。話しくい印象しかなくて、どちらかと言うと苦手な人種だった。だけど、彼も私も片親で育ったと知った時、意外な共通点に勝手な連帯感を感じた。特にそれを苦労だと感じたことはなかったけれど、「彼を理解できるのは自分だけ」という妙な自惚れは、恋心に拍車をかけた。

彼が見せる分かりにくい優しさにも少しずつ惹かれていった。

何度か二人で飲みに行くようになり、何度目かの帰り、思いが募って彼に告白した。

「ねえ、付き合わない?」

コートのポケットに手を突っ込んで歩いていて、冬の夜。足下を何気に見れば、彼の黒い靴と自分のパンプスが並んで歩いていた。それを見た時、気持ちが溢れた。

彼の靴がピタリと止まった。

はっとして顔を上げたら、彼の視線が私へ向けられていた。

「……。」

感情の読み取りにくい人だと思っていたが、今も表情が変わらない。勝算は多少なりとあると思っていたが、それは私の思い過ごしだったのだろうか。

「あつ、ごめんなさい。思わず……。」

告白した方が謝るのも、なんだか滑稽だと思ったが、口をついて出てしまったのだから仕方がない。胸元のマフラーを思わずぎゅっと握った。再びうつむいた時、彼が言った。

「……俺、あんまり人を好きになるとか、分からなくて。……俺と一緒にいても幸せになれないかもしれない。」

分かりにくいながらも、彼の瞳が揺れた。

戸惑いなのか、不安なのか、自虐……だったかもしれない。

「……それでも、良いなら。」

幸せになれないかもしれないなんて、そんなことを言われて、躊躇しなかったわけじゃない。だけど、恋に酔う女にはそれさえも、甘く感じて。

この人を幸せにできるのは私だけだ。

「……大丈夫。それでも良い。」

彼のコートの胸元をきゅっと握って、頬を寄せた。躊躇いがちに、彼の腕が背中へ回された。それからは順調な交際だったと思う。

喜怒哀楽が少ないながらも、大切にされていると思っていた。

半年経った夏。高速で二時間の遠距離になることが決まった。付き合ってから半年で結婚を口にするのも憚られ、それを受け入れた。

そこまで遠いわけではない。頑張れば一週間に一回会うことだって可能だ。彼の引っ越しのために、一緒に車でこの地に訪れた時に見た新幹線は、長く印象に残った。

水の都と呼ばれる大垣市を、徐々に知ることになったのは遠距離になって数ヶ月の間。

湧き水がいたる所であり、駅前のお菓子の和菓子屋さんの水まんじゅうと呼ばれる銘菓は、夏の風物詩だと言う。店の前の水槽に井戸水が贅沢に注がれて、演出される涼しさ。

初めて見る光景に、彼と並んで歩きながら、足を止めた。ぷっくりした半透明の丸いお菓子が、入れ物に入って気持ち良さに浸かっている。抹茶餡とこし餡を一つずつ、その場でいただいた。降り注ぐ蝉時雨。商店街のアーケードの狭間に見える空は青くて、この町はなんて夏が似合うのかと思った。

そうかと思えば、冬は何度か雪景色になった。スタッドレスタイヤに替えていなくて、彼の所に行けなかったりもした。

雪の降る日は、空を見上げた。鈍色の空から、自分めがけて降り来る雪を、飽きもせず眺めて、子供みたいに嬉しくなった。

冬も春も夏も秋も、良い町だなと彼の隣で季節を感じた。

だけど、季節を一巡りする頃、彼の所へ行く回数は減った。遠距離になった当初は無理をしてでも会っていたのに、もう一度夏を迎えた時には、一ヶ月に一度会うかどうかになってしまっていた。

彼が自分の所へ来てくれるよりも、断然私が行くことの方が多くて、それは、気持ちの比重を示しているような気がした。好きの気持ちが大いだが、足を運ぶ。会いたい方が伊吹を越えなければいけない。負担に思い、不満になったけど、そんな状況でも彼は何も言わなかったし、私も何も言えなかった。

八月の中頃。

別れを切り出す勇気はないまま、それでも未練はあって、すがるような気持ちで、伊吹を越えた。

合鍵で、彼の部屋に入れば、相変わらず物の少ない部屋が私を迎える。少しずつ、自分の物を並べていたが、彼の執着のなさを物語るような部屋だった。この部屋に一人でいると、まるで私さえも余計な物のような気がしてくる。きつと、そうなのだろう。私は彼にとって、なくとも良いもの。会えば変わらず優しいけれど、焦がれるような執着は感じなかった。

最初に彼が言った言葉を思い出して、自嘲する。

——好きになるとか、分からなくて。

それでも、良いか？

それでも良いと言った。そのうち、きつと彼にとって、かけがえのない存在になれると思っただけ。

自分に自惚れていた事を、この無機質な部屋に気づかされ、敗北感を覚えた。いたたまれなくなり、鍵を閉めて外へ出た。

相変わらず空は青くて、この田舎とも都会とも呼べない町の夏を彩る。時折、遠くに聞こえるゴーと言う音が新幹線の音だということは、とうに知っている。この町で初めて見たあの景色は、彼の言う通り、もう珍しいものではなくなっていた。

車を新幹線の見える方角へ走らせた。片側二車線の道路を西へ向かう途中、左手に新幹線が横切るのが見えて、ちらりと視線を向けた。その下に広がる田畑に、いくつかの幟がはためいて、緑の中に黄色い景色を目の端にとらえた。何か催しをしているのかと考え、同時に思いつく。

この場所で毎年行われている「ひまわり畑」のイベント。何万本の向日葵が、ドクターイエローが走る光景と共に、写真になったポスターが頭に浮かんだ。

気まぐれに、臨時駐車場へ車を停めて外へ出た。迎えるような蝉の鳴き声を聞きながら、肌を焼く太陽の熱に、日傘も帽子もない無防備さを後悔した。

少し歩けば、広大な畑の一区画が、背丈と同じ高さで一面黄色く咲き染まっていた。ひまわり畑の中に、歩いて入った人の頭が、ちらちらと見え隠れしている。見物客は多く、畔道に三脚を立てて、新幹線の高架の方へカメラを向けている人達もいた。

麦わら帽子を被った小さな女の子が、父親に肩車されていた。彼女の目線はこの中のどの大人より高い。まるで花の上を歩いているようだ。楽しそうな表情は絵本の一ページみたいに見える。何故だか、喉の奥がきゅつと、切なく詰まった。

夕刻となり、太陽はだいぶ西に傾いたのに、向日葵は東を向いたままだ。向日葵のくせに、

と思いつきながら、自分もひまわり畑へ降りてみた。ブーンと言う羽音があちこちから聞こえる。よく見れば、向日葵の真ん中の花の部分に蜂が止まっていた。

彼と来たかったなど、ふと思ってしまった自分に自嘲する。

向日葵のくせに太陽の方に向かないね、と言ったら彼はなんて言うのだろう。きっと無口な彼は何も言わない。でも少しだけ笑うかもしれない。私に渋々、付き合っただけで、黙って向日葵を見ているだろうと想像した。私はたくさん写真を撮るけど、彼は多分、撮らない。私の後ろを黙ってついてくる。

それでも良かったはずなのに、もう、ここまで来ることが苦しくなってしまった。

スマホをカメラモードにして待つ。遠くからゴーと音が聞こえてきた。上りの新幹線が、ひまわり畑の向こうに行く。だけど結局、一枚もシャッターを押せず、スマホをしまった。

多分、もう来ないかと、新幹線の走り去った高架を眺めて思った。自分勝手な愛情は、ただの自己満足だった。

苦い思いと共に焼き付ける。

この町を走る新幹線と向日葵。

駐車場に戻り、車に乗り込む。十五分ほど停めただけなのに、車内の温度は上がってしまった。エンジンをかけ、冷風が一気に車内に行き渡るように風を強めた。車を発進させ、高速のインターへ向かう。

この先、もし新幹線に乗ることがあれば、とその高架下をくぐって思う。

きっと、米原を過ぎたら、嫌でも顔を上げて、車窓の景色を眺めてしまうのだろう。

優秀賞

おもいでばこ

渡邊そよ香

「ママ、市民会館、なくなるらしいよ」
「は？」

「ママ、耳遠くなったんじゃない？」

「違うってば。お水出してる時は聞こえにくいって、前から言ってるじゃない」

私が蛇口を閉めながら答えると、洗い終わったお茶碗を、娘のマイが拭きにきてくれた。

「さつき、なんて言ったの？」

「市民会館、なくなるらしいよ。近いよー」

耳元まで近づいた私の顔を、マイは大げさに避けて、手早く拭いた食器を棚に片付けた。

「市民会館にはね、ママ、子どもの頃のいろんな思い出があるんだよね……」

マイが淹れてくれる食後のコーヒーは、本当にいつもおいしい。豊かな香りに誘われて、私はゆつたりと四十年前も前の私「清水ユミ」の昔話を娘に聞かせることになった。

夏休み前の、ちょっと浮かれた朝。いつもより教室の中がざわついている。私のクラス、三年二組には、学年でも有名なおしゃべり屋さんのナオちゃんがいる。その日の朝は、ナオちゃんを中心に人だかりができていた。

「本当にかわいかったんやで！ 黄色のドレスとイヤリング、ベストテンとかで見るのと同じ

やった！ 우리는、市民会館の前から五列目の席やったで。昨日は興奮して寝れんかった！ アイドルって本当におるんやなあ。テレビの中のヨシコちゃんより、本物のヨシコちゃんは、ずっと細かったで！」

「えー、ナオちゃん、いいな」

「私も見たかったな」

みんなが、次々と話しかけて、まるでナオちゃんは囲み取材を受けている芸能人のようだった。ナオちゃんは、自慢げに大声で話し続けている。みんなが羨望と好奇心の眼差しで、ナオちゃんを見ている。

アイドルのヨシコちゃんを見たらしい。それも、昨日市民会館に来ていたなんて。だから、あんなに夕方、車が多かったんだ……。心がざわついた。私はすぐ近く近所に住んでいるのに、知らなかった。きつと、お父さんもお母さんも知らない。すぐ近くに私の大好きなヨシコちゃんが来ていたのに、私には誰も教えてくれなかった。神様、ずるいよ。悔しさを含んだ心のざわつきが押さえられず、思わず拳を握り、深い深いため息をついた。

うちに帰ると、おばあちゃんが玄関先の水道で、畑で採れた夏野菜を洗っていた。

「……昨日、ヨシコちゃんのコンサートが市民会館であったんやと。うち、全然知らなかった。おばあちゃん、知ってった？」

「全然知らなんだよ。そうか、ヨシコちゃん、ござったんか。ユミちゃんはヨシコちゃん好きやで、それは行きたかったやろなあ。」

おばあちゃんに、本心を見抜かれて、気づくとぼろぼろと涙が出ていた。

「テレビの中の人やのに、市民会館に来るなんてずるいよね。うちだって見たいのに、見れへんかったなんて、ずるいよね」

涙が止まらなくなってきた私の頭を、おばあちゃんがゴワゴワした掌で、そつとなでた。

「おばあちゃんの秘密、ユミちゃんに教えたるわ。おばあちゃん、実はたくさん有名な人に会ったことあるんやで」

想像もしていなかった話だ。

「うちの畑、市民会館の前にあるやろ。そやから、ばあちゃんが畑におると、たまに演歌歌手や俳優さんが、見にござるんや。まんだこの間、サチコさんから、精が出ますねって声かけられたわ。じつと見てござったで、きゅうりとナス、あげましょか？ って差し出したら、いらん、言われたけど」

「初めて聞いた……」

みんなに言ったら、けなるがるで内緒やで、と言っておばあちゃんは、笑った。

「ここに住んどると、ユミちゃんが好きなヨシコちゃんも、いつか来てくれるかもしれんよ。畑に来てくれたら、ただで見れるしな」

おばあちゃんは、もう一度私の頭をなでた。涙はいつの間にか引っ込んでいた。

ミンミン、ミン。朝から蝉が鳴く。ヨシコちゃんの一件から、程なくして夏休みになり、すでに半ばを迎えようとしていた。窓の隙間から入る蝉の声は、目覚まし時計よりも大きい。起きたくない。行きたくない。それでも、毎朝ラジオ体操だけは行かなければならない。

夏休みの子どもの勤めだからだ。

「うちは蝉の鳴き声きらい。お母さんの声だけでもうるさいのに、なんで蝉にまで起こされないかんの」

「蝉は鳴くのが仕事。命がある時しか鳴けんのやで、きらわんと鳴かしたげて」

おばあちゃんは、不機嫌な物言いをする私にそう言って、赤い糸糸で三つ編みにした紐のラジオ体操カードを首にかけてくれた。

「ユミちゃんのスタンプも、今日で三列目になるねえ。ちゃんと毎朝、立派やねえ」

ビーチサンダルで、玄関を出ると、今日も日差しは鋭くて、脛がピリリとした。

ラジオ体操が行われている広場まで、毎朝おばあちゃんと並んで歩いていく。

ラジオ体操が終わると、「ねえねえユミちゃん」と呼ぶ声があった。振り返ると、左頬に人差し指が当たった。お馴染みの、あれだ。後ろから肩をたたかされると、毎回必ず引っかかってしまう。

「キヤハハ。またひっかかった」

抜けるような青空の下で、ひまわりのように笑うのは、六年生のお姉さん、アイちゃんだった。毎朝ラジオを広場に持ってきて、私のカードにハンコを押してくれる。背が高く、すらりとしていて、毎朝麦わら帽子をかぶっている。立ち姿もひまわりのように華やかなお姉さんだ。「ユミちゃん、今日ね、学校のプールから帰ってきたら、一緒に市民会館に遊びに行こうよ。ユミちゃんにも協力してほしいの」

なんだか、アイちゃんがワクワクしているように見えて、私もなんだかワクワクして、誘いに応じた。

プールの帰り、市民会館に行ったのは、登校班の全員だった。最年長のアイちゃんは、五人の子分を引き連れて、市民会館に向かった。建物の北側には見たこともない大きなトラックが止まっていて、黒いシャツのおじさんたちが汗を拭きながら、なにやら小声で話していた。

アイちゃん軍団は、そのまま建物の西側に静かにまわった。なんだか、急に怖くなった私は、プールバックをぎゅつと抱え、みんなの一番後ろを、ピツタリとくつついて歩いた。ジャリジャリと小石を踏むと、ビーチサンダルにゴツゴツした感触が伝わった。何度か大きな石があつて、転びそうにもなった。

「ここで、よし！ 止まれ！」

アイちゃんの号令に合わせて、私たちは止まった。全員が一行に並んでいた。

「みんな、タオル、出して！」

アイちゃんの命令に従った。次は、タオルをバタバタと振るように言った。バサ、バサ、バサ、バサ、みんな、タオルを振っているうちに、誰からともなくだんだん笑いが出てきて、バサバサ振りながら、アイちゃん軍団は大笑いした。全然面白くないのに、みんなと一緒にバスタオルを振っているのが面白くて、ゲラゲラ笑った。次は、みんな、ビーチサンダルを飛ばし合った。高くビーチサンダルが飛んでも、飛ばなくても、なんだか面白くて、みんなでゲラゲラ笑った。

一瞬静まり返ったあと、アイちゃんが「ミッチー！」と大声で叫んだ。アイちゃんのまねをして、みんなでミッチーと叫んだ。ミッチー！ ミッチー！ ミッチー！ ってなんだ？ と思いつつながら、私も叫び続けた。

ガラガラッ！ 勢いよく、市民会館裏の高窓が開いた。

「うるせー！」

怒られた！ 瞬時にそう感じた私は、高窓を見ることができなかつたけれど、そのすぐあと、アイちゃんが恐ろしいほどの悲鳴をあげた。アイちゃんの悲鳴につられて振り向くと、そこには、テレビで見る、いや、テレビでしか見たことがない、アイドルのミッチーがいた。

全員、固まった。本物のミッチーだったからだ。ミッチーは、そのあとすぐに引つ込んでしまった。高窓から顔を出すミッチーがスローモーションで、何度も頭の中で再生された。心が破裂しそうなくらい、高鳴った。

程なくして、同じ高窓から、白い買い物袋に入ったお菓子が差し出された。日焼けした腕に赤い紐のようなものが巻かれていて、白いビニール袋にだらりと紐が重なって見えた。

「これ、お菓子。落とすよ。じゃあな」

優しい声だった。でも、それ以降ミッチーは、二度と顔を出さず、高窓も開かなかつた。

一瞬の出来事に、誰も、ありがたうを言えず、ミッチーとさえ呼べなかつた。

その後のことは、あまり覚えていない。あの日のミッチーは、本物だったのだろうか、何度も思った。ミッチーは、私が一番初めに会った芸能人だった。今でいう尊い存在だ。四十年後の現在のミッチーは、テレビで見る限り、少し残念な普通のおじさんだけれど、おじさんミッチーを見る度に、今でも日焼けした腕に巻かれていた赤い紐の神々しさを思い出す。死ぬまで忘れないと思う。

市民会館は、夢の場所だった。ステージのある大きなホールは、みんなの夢が咲く場所。そして、建物の裏側は、私にとって、かけがえのない夢の咲いた場所だった。取り壊されてなくなったとしても、多くの思い出がみんなの中に生き続ける。大垣市民会館は、そんな、みんなの夢が咲いた場所なのだ。

佳作

小舟

中川薫

廓の二階から小運河が流れる様が見えた。水面に映る常夜灯が微か揺らめいている。廓の客は気だるげに煙草に火を点けた。静かな夜だった。

水面の揺らめきが急に大きくなる。客の男は煙草を口から離し、目を細めた。

「なあ、こんな夜更けに舟を漕いでいるやつがいるぞ」

「向かいの店の霧里だよ。舟好きの妙な女でさ」

廓の女が御髪を整えながら、つまらなさそうに続ける。

「気に喰わねえ時、ああやって気晴らしするんだってよ」

客の男がにやりと笑った。

「嫌な客にでも当たったんかねえ」

男はそう言つて、煙草の火を消した。

頬をなぶる川風はひんやりとしていた。

霧里はゆつくり水面を搔く。運河沿いの石垣に小さな影が立つのに気が付いて、頭をもたげた。

「霧里姐さん、今夜もう遅いよ」

店の女童だった。霧里は小舟を岸に少し寄せると声を張る。

「やつてられつかよ。今日の客な、ギヤマンのかんざしにべっ甲の櫛をくれるって、約束してたんだ。それがさ、盗人に盗られたっていうじゃないか」

「はあ」

女童の表情は見えないが、声音から呆れているのが分かる。霧里は、ふんと鼻を鳴らした。

「よくまあ、見え透いた嘘をついたもんよ」

「ええ…」

「さあさあ、お前は帰んな。わたしはもう少しここにいますよ」

女童はため息をついて、背中を向けた。ひとり残された廓女は走り去る小気味良い足音を聞きながら、再び舟を漕ぎ始める。

振り返ると、城の天守閣がやや遠くに見えた。そろそろ小舟の進む向きを変えなければ。

「あっちへ逃げたぞ！」

ふと男の怒鳴り声が聞こえる。霧里は眉をひそめ、辺りをうかがった。

人影がある。

大きな袋を背負っているのだろうか。やけに前かがみの男が運河の脇に見えた。後ろを気にしながらも、運河に片足を入れようとしている。

霧里は音を立てぬようにすうっと舟を寄せた。

「運河の水は冷いよう」

男が驚いて振り返った。霧里は片手を上げて、微笑んだ。

「乗せてくれるのか？」

「ゆっくりお乗りよ。この舟はナマクラでさ……」

男が何度も頭を下げながら、舟に乗りこんだ。

「かたじけない、誠にかたじけない」

「お気になさらず」

男は盗人なのだろう。霧里は陸を一瞥すると、川下へ出帆した。

「名前は」

男が沈黙を嫌うように訊ねた。

「霧里。その店の」

「ずっと廓に？」

「……人のことばかり聞くんだねえ」

霧里は少し笑った。

「海のほうで生まれたらしいよ」

「らしいって」

「覚えてないんだもの」

「おれも海生まれでさ、ここをずっと下ったとこだ」

「海は広いかえ？」

男の目が少し大きくなった。

「見たことないんか」

霧里は灯る鐘楼を指して、苦笑した。

「こっから出られんのよ。世知辛いねえ」

小舟が城下町の外れまで進む。

「いや、助かった助かった」

「ええ」

「礼と言っちゃなんだが、これを」

ギヤマンのかんざしを手渡す。霧里はそれを月明かりに照らし、目を細めた。

「……ところで、わたしは廓の女なんだけどさあ」

霧里が盗人の手を握る。

「ちよいと今、急ぎで……あー……いや……」

「安かないよ」

男の手がじつとりと汗ばんでくるのが分かる。霧里は腹の内ですわった。

「これだけで良い櫛が買えるくらいよ」

男がじつと目を見つめ返してきた。それから喉奥で笑って、肩をすくめる。

霧里は手を離れた。

盗人が背負った荷物から見事なべっ甲の櫛を取り出し、霧里の前に置く。

「じゃあ」

「では」

男は丁寧に一礼して、岸に上がった。

霧里はもらった櫛で髪を整えると、かんざしを挿す。

「ああ、世知辛い。結局、わたしの損になるんね」

霧里は舟を漕ぎ始めようとした手を止めた。陸に男がまだいる。

「ん、ぼったくったのが気に喰わない？」

「女が夜に一人で危なくないのか」

男がやや強い口調で問うてきた。霧里は頬杖を突く。

「早う逃げんと、捕まっても知らんよ」

「こんな夜中に平気なのか」

霧里は男を見上げたまま、少し黙っていた。男が返答を諦めて、踵を返そうとする。

「もういっぺん、お乗りよ」

遊女は口元に笑みを浮かべて、手招きした。彼は躊躇っているのか、辺りをきよろきよろしている。霧里は權を強く握ると、ふいとそっぽを向いた。

「乗らんのならいいわ」

男が首を横に振って、慎重に小舟に乗った。

ちやぷんと小さく舟が揺れる。柳の葉が川風にそよいでいた。

「いいのかい、遊女が」

少しの沈黙の後、男が口切った。霧里が喉奥で笑い、空を見上げる。

「男と会うときにゃ、ここが一番なんだよ」

唇を湿らせ、着物の襟を僅かに開いた。

「ね」

男がたじろぎながら、霧里の方へにじり寄る。霧里は男から目をそばめ、水面に目線に向けた。

うなじに熱いものが触れた瞬間、ぐわんと舟が揺れた。

霧里は咄嗟に傾いた方とは逆の縁を掴むと、重心を傾ける。静かな水面が今や、波立ち、ちやぷちやぷと音を立てる。

霧里は振り返ると、大きく笑った。そこには驚いて腰を抜かした男がいた。

「ナマクラでさあ、舟底が歪んでるんだと」

霧里はゆっくり舟を止めた。

「この限り、私は夜鷹にならんよ」

「……そうかい」

愁いを含んだ声音だった。

霧里は目を伏せ、着物を整えるために權から手を離した。

男がおもむろに立ち上がる。

「最後にな」

「うん」

「一つ盗みたいものがあつてさ」

男が舟の權に手を伸ばした。

霧里は權を取り返そうとするも舟が大きく揺れて、思わず舟底にへたりこむ。

「何処へ行くの」

「海だよ」

その夜、一艘の小舟が鐘楼の脇を通り過ぎてゆく。

2022年度の「水の都おおがき 短編小説コンクール」には、
37点の応募作品が寄せられました。
入賞作品の表記は、原作を尊重し、それに従いました。

水の都おおがき 短編小説コンクール 優秀作品集 二〇二二

令和5年2月23日発行

<監修> 中村 航

<編集・発行> (公財)大垣市文化事業団
大垣市室本町五丁目51番地
(大垣市スイトピアセンター文化会館2階)
TEL 0584-82-2310

<DTP> 七守 悠

